

Raymonde Monnier;

*L'Espace public démocratique.
Essai sur l'opinion à Paris de
la Révolution au Directoire*

レイモンド・モニエ著

『民主的公共空間——革命と総裁政府期
パリにおける世論についての試論——』

竹 中 幸 史

本書は革命期パリの民衆運動を研究しているR・モニエ女史の近著であり、主に一七九一年から総裁政府期までのパリにおける「世論」「公共空間」が考察されている。彼女の論の基調をなすのは、ハーバーマスのいう「公共圏」の問題である。フランス史研究において、「世論」の問題は、主に旧制度の研究、もしくはシャルチエやベイカーに見られる革命の文化的起源をめぐって進展してきた。フランス革命期の政治文化と直接リンクさせた研究はこれまで見られなかったわけであるが、本書は、世論の創出と喪失、民主的公共空間の拡大と収縮を視野に入れながら、革命期の共和主義運動を検討している。

本書では、政治結社に特に焦点が絞られている。これまで革命期の政治結社の研究といえば、パリおよび地方のジャコバンクラ

ブが主な対象とされてきた。個別研究はもとより、古くはプリントン、近年ではケネディやブチエとブートリーによる総合研究が地方のジャコバンクラブについて為されている。しかし本書が主たる対象として取り上げるのはジャコバンではなく、パリ市内の地区に相当するディストリクトおよびセクションの民衆協会である。さらに結社と共に世論の形成に大きく寄与する出版物、セクションの諸制度、セルクルとよばれる結社や個々の活動分子にも目が向けられている。

革命期パリの民衆の結社に関する研究は意外に少ない。確かにブルダンの先駆的業績、共和二年のサンキュロットに関するツプールの研究、またわが国においても岡本明氏、井上すゞ氏や柴田三千雄氏らの業績がある。しかしフランスでは近年パリの結社についての研究は非常に少なく、その意味で本書はパリの政治史についての最新の成果といえよう。

周知のように、この四半世紀の間に歴史学の潮流は大きく変化した。特に革命史研究にかかわることでの大きな転換は「政治文化」論に代表される、政治史への回帰であろう。八〇年代に大きく進行した政治史志向は社会史の洗練を受けた形で、文化史の形態を取って現われた。その主たる研究はこれまで注目されなかった分野、検討し尽くされたと思われる分野に多く見受けられた。こうした趨勢においてモニエは、ツプールの研究で語り尽くされた感のあったパリの政治結社を、世論の形成という側面から、いま一度研究の組上に乗せるのである。

評者はフランス革命期ルーアンの政治結社の研究を専門とし、革命期の公共空間とソシアビリテの関係を明らかにすることを課

題としている。その点で本書は評者の研究の出発点となり、また比較研究の材料ともなるものである。

著者の論点は多岐にわたり、とても全部を紹介できないが、以下各章ごとに簡単な内容の要約と評を行なうことにする。

Avant-Propos et Introduction

ここでは本書で扱うテーマの全体的な見取り図と、研究対象となるパリの政治に関するイメージについて述べられている。まず革命期のパリの民衆運動を扱ったソブール等の先行研究に触れ、それがサンキュロットに焦点をあてた点では評価しながらも、コミューンとコルドリエクラブを軽視していることを批判する。なぜなら、首都に卓越した役割を与えたのはサンキュロットだけではないからである。その運動の背景にコミューン、県、大小の政治結社による権力の「仲介」があったからこそ、サンキュロット運動は力を持ちえたのである。こうして著者は、統一的な行動・意志が完成されるには、さまざまな「仲介」が存在することに重点をおく。そして民主的な運動の「仲介」を研究することにより、相互の空間を構成している絆を見だし社会構造と政治的実践の間の関係とずれを再考するのである。

上記のような研究の見通しのうえで重視されるのが当時の新聞とソシアビリテ、特に政治結社である。しかしここでは研究対象はジャコバンクラブではなく、民衆協会、セルクルや学校などにむけられる。このことはこれまで多くの研究がジャコバンに偏っていたことを修正することになる。

次に革命期のパリについての政治に関するイメージが列挙され、

次章以下の研究の道筋が示される。そして著者はパリの役割を正しく検討することが民主主義的思想の道筋、批評的討論空間の出現を問うことにつながるとし、本論に入っていく。

1. Le Projet Démocratique

著者は、これまでの研究が九三年を強調するあまり、革命初期の政治的・文化的ダイナミズムを軽視していると批判する。そこで本章では主に九一年のパリにおける政治結社の活動と、世論の形成・発展を検討している。

九〇年から九一年にかけては、パリにはサンキュロットが加入する民衆協会や労働者の結社が多く創設された。革命家達はそれを世論が生まれ拡大してゆく場としてみていた。それに対し議会とは、集団による請願権を禁止する九一年五月一〇日のデクレで、結社の活動を制限しようとした。このデクレはロベスピエールらジャコバン左派の他、パリの民衆の諸結社から猛反発を受ける。これはルジャブリエのように請願権を個人に属すものとする側と、それは自然権に属すとする側の対立であった。

このデクレは結社による当局批判や、発展・増大する結社の活動に、当局が不安を抱いた結果であった。そして議会とパリの人々の対立は、世論を統制しようとする側と、意見を自由に表明しようとする側の闘争であり、当局が結社の世論動員力を高く評価していたことの証である。このデクレは各結社で物議をかもししたが、本章では「真理の友の会」の一機関であったセルクル・ソシアルが取り上げられている。セルクル・ソシアルは九一年二月以来、諸結社に席を開放し互いの活動内容の情報交換と監視を促し

ていた。ここで展開された討論が世論の支持を得て七月の共和政支持キャンペーンを準備したのである。

こうした状況下、諸結社の勢力を結集し「連盟する」fédéraliser動きが結社のリーダーたちから生じてきた。著名なジャーナリストであるロベールによって九一年五月に設立された「愛国協会中央委員会」がその一例であるし、また前述のセルクル・ソシアルの開放もその一環である。一方、ヴァレンヌ事件以後こうした動きと平行して、パリの世論では「共和政」「主権」というテーマが浮上した。第三節ではこの時期のセルクル・ソシアルの理論的指導者である作家・ジャーナリストの、ボンヌヴィルの思想が詳細に検討されている。世論形成能力と主権についての彼らの理論（世論Ⅱ第四の権力機関）は代議制と対立するものであった。こうして九一年、パリでは、コルドリエクラブやセルクル・ソシアルの周囲で、結社が取り結ぶヨコの連帯である「連盟主義」（「フェデラリズム」）が形成されていた。

九一年の結社を巡る論争とリーダーの思想を、わが国ではあまり知られていない「真理の友の会」やセルクル・ソシアルの活動から論じることが興味深い。また、これまで九一年の結社、団体に関する規制については、アラルド法やルシャブリエ法にもつばら関心が集中されてきたことを考えると、著者が五月一日のデクレに焦点をあて、結社の活動を検証することは注目に値する。しかしデクレと上記の法の思想的関係には踏み込めていないことが惜しまれる。

2. Jacobins Cordeliers et Sans-Culottes

本章では主に九一年から共和二年春までの運動を扱い、主にコルドリエクラブのジャコバン派による世論動員の努力と議会による弾圧が描かれている。ソブールは九三年に民衆協会がセクシヨンのあらゆる生活に関与したと主張したが、これに對しモニエは、結社がローカルな事例に関わるものの、世論表明というかつての機能を喪失しているとしてそれを跡付けようとしている。

九一年秋以降、民衆協会は選挙において、候補者の人選や長所について討論し第一次集会の作業を準備する、圧力団体として機能するようになった。このことが結社を単なる仲介者から脱却せしめ、行政リーダーの母胎に化すことになった。

政治結社は九三年には市内だけで四〇ないし五〇も設立されており、これは世論における民主的思想の成功を示している。結社のリーダーは選挙を通じて行政機関に入ってゆき、九二年八月一日以降、この動きは加速する。各結社はその会員をパリ市全体から集めていたが、リーダーは各セクシヨンの活動分子であり、特にコルドリエクラブの会員が大きな影響力を発揮していた。

次に著者はより具体的に検証すべく、リュクサンブール、マラーの二つのセクシヨンの活動から九二、三年の世論の役割を考ええる。リュクサンブール・セクシヨンの結社はコルドリエクラブの活動に追従し、九二年五月頃から反王政的な色彩を強くする。またパリや地方の結社と連帯を強く密にしており、ここには九一年夏の「フェデラリズム」のプログラムがうかがえる。セクシヨンのリーダーはコルドリエクラブの会員であり、九三年以降、

若干の民主化がみられる。

一方マラー(旧テアトル・フランセ)・セクションのリーダーにも、九一年以来コルドリエクラブの会員が選出され、以後数年間彼らがセクションの政治を支配した。九三年九月以降はサンキュロットがセクション行政に浸透し、革命委員会へも進出している。しかしこれら二つのセクションにおいても、共和二年ジェルミナルとブレリアルに政府が介入し、サンキュロット層の排除、結果としての穏和派の勢力復活があった。

本章ではコルドリエクラブの会員のセクションへの浸透が詳細に描かれている。サンキュロット層と議会のあいだに位置するコルドリエクラブの会員のセクションでの権力把握、影響力が実証的に示されていて、パリの民衆運動の実態の理解に役立つ。ただし著者は結社の世論表明という機能の喪失については、結社が政府に取り込まれたことを述べるばかりである。究極的にはそうだととしても結社の編成原理に問題はなかったのだろうか。

3. L'Espace républicain

本章ではロベスピエールのコミューン観、共和主義の「学校」、パリ郊外の「政治化」、そして共和二年春のパリにおける民衆協会の解散が扱われている。九二年八月一〇日以後、ロベスピエールはコミューンの代表の一人として活躍した。彼はパリのコミューンやセクションが、地方都市の自治体や民衆協会と連絡を直接取ること(これは公会から「フェデラリスム」として攻撃される)を擁護し、蜂起権の正当性を自然権の観点から主張した。彼は世論・人民と立法者を直接結びつけるという構想をもち、パリのコ

ミューンに彼の革命理論において、蜂起権を有する特別な位置を与えていた。また彼は第一次集会による議員選出と法の審査を考えており彼の世論に対する態度があらわれている。

著者は次に、革命期パリの教育について論じる。革命期の政府は「市民」教育の観点から、教育には大きな関心を寄せていた。しかし本節では政府の公教育政策などではなく、教育に対する個人的・自発的努力を取り上げている。例えばレオナル・ブールドンが九二年春に設立した「フランス若者の会」、共和二年には四八セクションすべてにでき一三五〇人以上の生徒がいたセクションの学校、さらに「共和主義の学校」としての民衆協会が検討される。子供のみならず大人も「学校」で「市民」としての教育をうけ共和主義的徳を身につけたのであった。

また次節では、パリ郊外における「政治化」の状況が取り扱われている。パリ郊外では九三年秋以降、政治結社が多く設立され、その創設者達は教師など村の文化生活のリーダーであった。活動の中心は教育、監視活動、食料問題、非キリスト教化などであり、郊外の結社同士やパリの結社と提携し、特にコルドリエクラブとの結びつきを重視して会員との緊密な関係を保持していた。共和二年春にはほとんどの結社は活動を停止してしまうが、政治結社の経験は短いながらも、新しい価値の普及、共和主義的公共空間の形成に大きな影響力をはたした。

最後に共和二年春のパリの民衆協会解散について述べられる。従来ソプールの説明では、ジャコバンとセクションが対立し政府からの圧力で民衆協会は解散・活動停止に追い込まれたとされるが、ここではこの解釈に一定の修正を迫っている。ブルータス・

セクション、シャリエ・セクションの会議や建白書を検討すると、民衆協会の活動停止の決定は、九三年秋以来のセクションのリーダー自身によって行なわれたことがわかる。彼らはセクション内の反革命勢力が民衆協会に浸透しないように活動を自粛したのであり、一方的に上からの圧力で解散したわけではなかったのである。この時も公会議員たちは結社を世論を「連盟する」存在として批判している。

本章の内容は多岐にわたり、各節の連関は薄く感じられる。ロベスピエールのコミューン観と世論の創出の関係は希薄であるし、「学校」についても、クラブを「市民」教育の場として捉える視点は良いのだが、セクションや一般の学校と民衆協会を同列で論じることがやや早計である。むしろ「市民」としての教育が必要という点では子供と民衆は大差なし、とみられていたことに注目すべきではないだろうか。一方パリ郊外の結社の活動がしめす連帯は、地方におけるいわゆる「ジャコバン・フェデラリスム」を想起させる。著者はここからコルドリエクラブのバリ外への、また全国的影響力をいわんとするのであろう。またソブールのテーゼに対する批判は妥当で、議会対サンキュロットという図式が単純化できないことを教えてくれる。

4. De Thermidor à Brumaire

本章はテルミドールの反動以後総裁政府末期までの、世論をめぐる政府と結社の対立を扱っている。テルミドール反動以後、地方の結社間では書簡の交換が再び活発化した。モンターニュ派の結社は世論を喚起し、結社における監視を再び覚醒しようとして

いた。国民公会にあてた地方結社の建白書も増えヴァンデミエールにその数はピークを迎えるが、以後減少していった。

結社に対する攻撃はヴァンデミエール二五日のデクレで決定的に見られる。これをめぐる対立は九一年の議論を再燃させるものであった。反結社派は思想のコミュニケーション・連絡としての集会権を個人に属すとし、結社は世論を「連盟する」という批判を展開した。一方擁護派はその自然権の性格を主張したが、結局彼らの主張はこの時期にはもはや通じなかった。

パリのセクションにおいてもジャコバン主義は衰退していった。共和三年ブリュビオーズにはフォールブルや中心部のセクション総会は完全に穏健派の支配するところとなった。そしてヴァントーズにはパリにおいて完全にサンキュロット勢力は敗北してしまふ。

新憲法のもと政治結社の活動は禁じられ民衆の集会はカフェ等で繰り返されていたが、結社は共和五年に復活することになる。これらは「合憲的セルクル」と呼ばれ選挙などに一定の影響力を行使した。この活動再開についても右派とネオジャコバンなど共和派は対立する。この対立について総裁政府は、結社の活動に禁止と寛容をくりかえす。結局、政府は公共空間の民主的復活と拡大に反対し、共和六年ヴァントーズにはパリをはじめとしてセルクルの閉鎖を命じることになる。政府は、批評的公共空間の拡大・収縮をつうじて、世論の発展を阻害してしまったのである。

本章で著者のいう公共空間の収縮については一応首肯できるが結社の活動をその目安とするならば、この収縮はむしろ共和二年冬／春に求められるのではないか。また「合憲的セルクル」につ

いての叙述は短く、活動はほとんど明らかにされない点は不満が残る。

以上、本書の内容紹介と評をおこなってきたが、最後に全体を通読して評者の感想を二、三述べておく。まず、パリの民衆運動に介在する結社、セクションやそのリーダー、さらに世論を喚起する新聞の存在は、ある程度ハーバーマスのいう「公共圏」が革命期パリで開花したことを示しているといえるだろう。こうした一連の動きが、コルドリエクラブを軸とした権力の「仲介」で結びついていたことも検証されている。このことから、革命期パリの世論形成にコルドリエクラブが大きな影響力を果たしたことがわかる。この結社の機能は、地方に六〇〇以上存在するジャコバン^①の地方支部にも認められると考えられ、地方都市の結社研究にも一石を投じることだろう。また本書では、本来民衆が排除され「ブルジョワ的」であった政治的公共空間に、民衆層がコミットしていった様子も明らかにされており大きな成果のひとつとなっている。

政治結社やセクションが形成するヨコの連帯「フェデラリスム」に対して当局が再三恐れ反対する様子は、いかに世論が政治の正当性を保証するものとして意識され、その発露の場としての結社が重要視・危険視されていたかを物語っている。近年研究が進む地方における「ジャコバン・フェデラリスム」とも関連させることで、中央がめざした政治構造と現実とのギャップという、より大きな問題を射程に含めることができるだろう。

しかし公共空間の諸制度がフランスでは革命期に一気に開花し

たというハーバーマスの主張を、モニエが単純に踏襲し論を展開することについては注意が必要と思われる。というのもハーバーマスの主張はモデルが先行しすぎており、結社の議事録などを検証すると、結社の実際の活動と彼のモデルとは齟齬をきたすように評者には感じられるからである。

民衆協会などの政治結社は革命直前から九一年にかけては自由な意見表明の場であり、世論が生まれる場であったことに評者も特に異論はない。しかし九三年以降、結社はメンバー同士の中傷・非難や一般席からの怒号が聞かれる場にもなるのである。^②これは入会が民衆層に開かれ結社が急進化したことにより生じたのだが、ここでは自由な発言ができなくなってしまう。さらにジャコバン独裁期には結社が中央政府と密接に関係して行政組織化し、政府に対する反対意見は排除され、述べられる意見はあらかじめ方向性を設定されてしまう。つまり同じ政治的ソシアリティといっても、ジャコバン独裁期には、初期の政治結社がもっていた「自由」という編成原理はみられなくなるのである。

少数のリーダーたちによる民衆協会支配と結社の急進化、そして政府の下部組織としての位置づけ。このような状況下、結社で表現されているのは既に世論とはいいたくない。この点については、表明されるものが「世論」*opinion publique* から「公共精神」*esprit public* に移ったという革命史家オズワートの主張をあわせて考える必要がある^③。

確かに恐怖政治期は民衆層も結社への参加などを通じ、政治参加を経験し、民主的な公共空間が拡大したといえる。一方で結社の内実は変化していたことも事実なのである。とすれば、恐怖政

治期は公共空間の拡大と縮小が同時に存在した、もしくは公共空間は内部崩壊しつつあったと考えるべきではないだろうか。

ハーバーマスのモデルはその明快さゆえに歴史家にとって魅力的である。しかしあまりに無批判に受け入れられてはいないだろうか。政治的シニアビリテの性格の変化、「世論」から「公共精神」への移行、公共空間の一定の発展と挫折という三点から、彼のモデルを修正・補強するべきでないかと評者は考える。

とはいえ本書が、世論、公共性の問題を革命史と結びつけた点で先駆的な労作であることに変わりはない。シニアビリテ論や政治文化論、文化変容の問題と重なる世論の研究の可能性が、革命史研究に大きく開かれたともいえる。実際に公共空間に関わる問題はコローク「都市とフランス革命」^③でも取り上げられ、革命史家の間でも重要な問題となりつつある。今後は地方都市における世論や公共空間についての比較研究も進展するだろう。その際本

書が研究の土台として必携の書となることは間違いない。

① この点については Shigeo Tomioka, "Voice and Silence in the Public Space—The French Revolution and the Problem of Secondary Groups—", (Text prepared for the conference (Public Place and Democracy), U.C. San Diego, May 2-4, 1996) より示唆を得た。

② モナ・オズーフ、阪上孝訳「公共精神」フュレ、オズーフ編河野、阪上、富永監訳『フランス革命事典2』みすず書房、一九九五年。

③ Bruno Benoit (dir.), *Ville et Révolution française. Actes du Colloque international, Lyon, mars 1993*, Presses Universitaires de Lyon, 1994.

(B5判変形 二八七頁 一九九四年 Paris, éditions Kime)

(京都大学大学院博士後期課程)